

# サケの人工ふ化

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



明治の終わりころのサケ漁。当時の十勝川(今の浦幌十勝川)河口近くの十勝太(浦幌町)で。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)

明治12年(1879)に十勝組合が解散すると、十勝の漁場に多くの漁師が入ります。漁業は発展し、魚も多くとれるのですが、サケの数は減ってきていました。

サケは北太平洋で育ち、生まれた川に帰って産卵します。漁では、その帰ってきたサケをとるため産卵するサケが減り、生まれるサケも減ってしまったのです。

明治16年(1883)、川の中流以上でのサケ漁が厳しく禁じられましたが、これはアイヌの人たち(と移民)を苦しめたため、その後少しゆるめられました。( p146)

明治20年(1887)、漁民が集まり「十勝漁業組合」ができました。十勝漁業組合は、サケを増やそうとします。組合員は、とったサケの量によってお金を出し、密漁防止と「ふ化場」づくりをめざしました。



(上)明治終わりころのふ化場。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)

(右)ふ化場があったあたりの今のようす。帯広市東9南4~5。



## ヌップク川や旧帯広川支流にできたふ化場

明治28年(1895)、十勝漁業組合はヌップク川(帯広市大正)に、小さいながらも「ふ化場」をつくりました。ふ化場は、サケの卵をとって人の手でかえし(ふ化させ)、サケの子どもを川に放して(放流して)サケを増やそうとするところです。( p236)

明治29年(1896)、とった卵の1/3くらいながらもサケを放流しましたが、次の年にカミナリが落ち、ふ化場は焼けてしまいます。しかし、漁業組合は補助金を受け、幹部が寄付金を出すことで、明治32年(1899)、帯広川(今の旧帯広川)支流のパラト川に「十勝鮭鱒孵化場(帯広ふ化場)」をつくりました。このふ化場は技術を高め、施設を増やし、明治40年(1907)ころには、北海道でも指おりのふ化場となりました。

## 工場廃水による卵と稚魚の全めつ

昭和4年(1929)、十勝鮭鱒孵化場で育てていたサケの卵と稚魚(子ども)が、全めつしました。

きれいなわき水を使っていたのになぜ、と調べてみると、工場が廃水を売買川に流し、そのよごれた水がしみこんで地下水となり、これがわき出したものとわかりました。わかるまでに2年かかりました。

ふ化場を運営していた「十勝外四郡 鮭鱒養殖組合」は、工場と2年間交渉し、補償が出ることになりました(この間は仮のふ化場を使う)。

昭和8年(1933)、新しくヌップク川(帯広市大正)に建てられた「十勝ふ化場」で、改めてサケのふ化がはじめられました。次の年、北海道のふ化事業は、北海道庁に受けつがれました。



(上)ふ化場があったヌップク川での観察会(ヌップク川をきれいにする会)。おくの「せき」が、ふ化場へ水を引くためのもの。

(右)昭和34年(1959)、ヌップク川ぞいに建てられた石碑。今ではここにふ化場はないが、「さけますセンター(3)」がある。



1 密漁(みつりょう): 法律や規則に従わないで魚などをとること。  
2 稚魚(ちぎょ): すべてのヒレのズジの数が、成魚と同じになってから、ウロコでできあがるまでの間の魚。その前は仔魚(しぎょ)。サケは、仔魚の間は栄養のふくろを

つけていてエサをとらず、稚魚になってからエサを食べるようになる。  
3 さけますセンター: 正確には「独立行政法人水産総合研究センター さけますセンター 帯広事業所」。帯広市大正町基線。